

社会理論と実験

青山学院大学大学

大林真也

かねてより、マクロ社会学やシステム論など一部の分野を除き、社会学の多くの分野では、社会に住む人々の行為、社会関係、相互行為、その帰結などに焦点を当てて研究を行ってきた。そのため、多くの社会理論は人々の行為に関する命題群から成り立っているものが多い。

一方で、このような社会理論の検証を担う方法として社会学では、従来からサンプリング調査が多用されてきた。しかしながら、サンプリング調査では各サンプルが独立に抽出されたものであり、社会理論が想定する人々の相互依存的な行為を検証するには原理的に困難である。また、変数間の因果的な関連を分析する際にも、交絡要因などの影響により、内的妥当性を確保することが困難である。仮に可能だったとしても近年では、回収率の低下などによりデータの質が著しく低下しており、理論の検証に耐えうるものとは言い難い。したがって、一部のものを除き現在のサンプリング調査が行っているのは、社会理論の検証というよりも、現状の記述であると言える。

そこで、本報告では社会理論の検証について、従来のサンプリング調査ではなく実験の持つ意義を考察していく。ここでいう実験とは、実際の人を使った実験（実験室実験、オンライン実験）とコンピュータプログラムによるシミュレーション（仮想実験）の二つを意味している。

前者は、社会理論が蓄積してきた人々の相互行為に関する命題群を検証するのに十分な可能性を秘めている。実験の設計にもよるが、人々の関係を準備し、相互行為を行わせて観察することもかのうである。また、分析に際しては内的妥当性を確保することも可能である。さらに現在では、オンラインでも実施可能であり、実施に関するハードルが下がっている。一方、後者は前者によって明らかになった人々の行為（相互行為）の傾向を、モデル（プログラム）に組み込み、人々の行為からマクロな帰結が現れるための条件を精密に分析することが可能である。また、経験データを組み込んだモデルを分析することで、計量分析だけでは内的妥当性が保証されない場合など（推定量に一致性がない、逆の因果が存在する可能性がある）に補完的に分析を行うことも可能である。たとえば、理論分析から明らかになった均衡戦略に、現実の人々が仮に従っていると仮定した場合、マクロな帰結がどうなるのか、など。

このように社会理論と経験的データを架橋するうえで、実験は重要な役割を果たすことが見込まれる。本報告では、これまで社会学でも試みられてきた実験研究や筆者の実際の実験研究を叩き台とし、実験研究の社会理論に対する意義・欠点に関する論点を整理し、議論していく。